

インタビュー

まちづくりと図書館 ～コミュニティの中の図書館～

全国各地で、今までの印象を変える図書館が出てきています。課題を解決するためにさまざまなサポートをしてくれるレファレンスサービス、高齢化社会や障がい者のニーズに細かく対応してくれる運営、生涯学習や青少年・市民活動などの支援機能を合わせ持った複合施設での展開など、まちづくりの中で重要な役割を果たしている図書館もあります。

そこで、全国各地の図書館を取材して2014年に『つながる図書館—コミュニティの核をめざす試み』を出版された猪谷千香さんに、こうした図書館の動きについてお話をお聞きしました。

(インタビュー日：2018年12月12日)

きっかけは東日本大震災

——猪谷さんの著書『つながる図書館—コミュニティの核をめざす試み』では、全国各地の図書館を大変丁寧に取材されています。猪谷さんが図書館に関心を持ったきっかけは、何だったのでしょうか。

猪谷 私は大学の専攻が考古学で、以前から図書館のヘビーユーザーでした。大学図書館に加え、そこにはない資料があればいろいろな図書

ジャーナリスト・文筆家
Chika Igaya

猪谷 千香氏



館に行っていました。大学卒業後は新聞社に入社し、リサーチのために図書館を利用していました。東京勤務だったので国立国会図書館、都立図書館、区立図書館、大学図書館など、あちこちの図書館に通いました。その生活が日常的だったので、図書館を取材対象に考えていませんでした。

図書館を見つめ直すきっかけになったのが、東日本大震災です。震災当日、私は産休を取ったばかりで、自宅でテレビやインターネットのニュースを見ていました。あのような未曾有の大災害では、最初に復旧しなければならないインフラがあります。ところが、それとほぼ同時に全国から被災した図書館に救いの手をさしのべる人が現れていました。図書館関係者や図書館好きの人がインターネット上でつながって、一種のムーブメントが起きていて、電気が完全に復旧していない中で仮開館する被災地の図書館もありました。

人間は本を読まなくても生きていけるはずなのに、なぜみんな図書館を欲しているのか、とても不思議に思いました。そこから、私たちの社会やコミュニティの中で、図書館はどういう役割なのか、みんなの心の中でどんな存在なのかを考えるようになりました。

当初は、震災をどうやって記録し、未来に伝えていくのかという方法に関心がありました。動きが早かったのはグーグルやヤフーで、インター

ネット上に掲載された写真や動画を集めて公開していました。そのうち図書館や博物館、大学などの機関も収集を開始し、今ではそれらを横断する「ひなぎく」という国立国会図書館東日本大震災アーカイブにまで成長しています。

図書館の機能の一つは、人の記憶を伝えていく、歴史を伝えていくことで、それが非常に重要であると実感しました。

全国に影響を与えた^{たけおし}武雄市図書館

——ご専門の考古学の問題意識と共有する部分があったのですね。これからの地域社会は急速な人口減少、高齢化を迎えますが、このような厳しい時代の中における、図書館の役割や可能性をどう考えていますか。

猪谷 皆さんの図書館のイメージは、ベストセラーや小説がそろっていて、本を借りたり、読んだり、勉強したりするところというものでしょう。しかし、それがこの15年ほどで激変しています。

その背景はいくつかあります。一つは政治の流れです。地方分権改革によって、例えば以前の図書館長は司書資格が必要でしたが、その制約がなくなり、多様な人材を館長に迎えられようになりました。また、小泉政権時代には指定管理者制度が導入されました。指定管理



者制度は賛否両論ありますが、民間企業が図書館を変えたことは間違いありません。カフェの併設や開館時間の延長、休館日の減少など、民間的なサービスを提供してくれる図書館が増えてきています。

また、コミュニティの中でも自分の居場所がない人たちを受け止める場所として、図書館に期待をかけているところが増えてきているように思います。

図書館は黙っていても一定数の人がやってくる施設です。図書館を集客装置ととらえ、まちおこしや観光を連動させて、まちづくりの核にしていこうという動きが自治体から出てきても不思議ではありません。

そのようにいくつかの流れの中で、現在のような多彩な図書館が各地で花開いたという状況だと思います。

——図書館の魅力を高めていく動きとともに、政策の仕組みが変わっていく中で、図書館が変化していった側面があるわけですね。指定管理者制度も大きな転換点だったといえるのでしょうか。

猪谷 全国の自治体に影響が大きかったのが、佐賀県の武雄市図書館です。武雄市は人口5万人程度のまちで、「TSUTAYA」を展開してい

るカルチュア・コンビニエンス・クラブ(株) (CCC) が指定管理者を受託しました。2013年4月に図書館がリニューアルオープンし、スターバックスコーヒーの併設やエンターテインメントの要素を組み入れた空間などで来館者数を伸ばしました。図書館のあり方として議論はありますが、初年度の来館者数は92万人超になりました。しかも、市外からの人が多かったのです。わがまちにもそんな施設があれば、外から人が来てくれると期待する首長や議員が出てくることは必然でしょう。実際、その後、全国にTSUTAYA図書館が出現しています。図書館運営はCCCと組まなくても可能ですから、TSUTAYA図書館を参考に、独自で運営してまちづくりの核に据えていく動きも盛んです。

——武雄市図書館は賛否両論がありますが、あの集客力は画期的なことでした。武雄市図書館をきっかけに新たな図書館づくりの議論が加速し、新しい挑戦をする図書館が出てくるようになったと感じます。

猪谷 図書館に対して確固たる理念を持っておられる方からすれば、あのような図書館のあり方は論外と思われるでしょうが、集客装置の役割を担った図書館に魅力を感じる人たちがいることも事実です。

また、日々のニュースの中で、あそこまでマスメディアに登場した地方の図書館は、今までになかったと思います。

——既成概念を打ち破ったという点では北海道旭川市の旭山動物園に似ていますね。動物の行動や生活を見せる展示形態で一気に来園者数が増えました。

一方で、これらは行政の施設ですから、運営では首長の意向が反映されます。図書館に首長の理解があるかどうかは大きな要素でもありますね。



指定管理者制度を考える

猪谷 図書館が変わる一つのタイミングは、やはり選挙だと思います。例えば、立候補者が子どもたちのために図書館改革をします、もっと魅力的な図書館をつくりますと言うと、反論しづらいでしょう。実際、新しい図書館ができる、初年度は必ず人がたくさん来ますし、メディアもニュースに取り上げますから、成功しているかのように見えます。ですから、人気政策として積極的に図書館を活用している面があると思います。

ただ、運営では、財政面から指定管理者制度を導入しているところもあります。本来の目的ではないのですが、主にコストカットの意味で指定管理者を採用している例が見受けられます。

——指定管理者制度が導入されて一定の期間が経過しましたが、現在の様子をどのように受け止めていますか。

猪谷 指定管理者制度は2003年に導入されましたが、採用している自治体の理由はさまざまです。

利用者の立場からは、確実にサービスが向上していると思います。以前は自治体職員がカウンターにいても愛想が悪いなど、評判が良くありませんでした。でも、民間のサービスは接客も良く、非常にサービスが向上しました。自治体としても、市民受けする図書館を運営できていることになります。

でも、図書館の現場で働く司書からすると、不安定さを感じていると思います。指定管理者は3年や5年の契約が多いのです。本来の図書館は長期的な計画のもとに運営されなければいけません。図書館に指定管理はなじまないという批判は制度導入時からの主張で、それには一理あります。また、非正規雇用の増加にもつながるという問題も指摘されています。

このようにメリットもデメリットもあるのですが、デメリットが解消されていないことが問題です。しかし、導入から15年も経過し、これだけ浸透してしまうと、すべての指定管理者図書館を自治体直営に戻すことは難しいでしょう。

そこで、一つの方向としては、指定管理者制度で働いている人たちの雇用と地位を安定させ、かつ長期的な運用をどのように確保していくかということを検討していくべきではないかと思っています。

——図書館運営は自治体の行政サービスの中でも大切な分野の一つです。図書館は蔵書やその情報を生かして、知的生産を営んでいく地域のインフラですから、個人的には外部に委ねることは慎重であるべきだと考えています。仮に指定管理者制度を導入する場合は、長期的に安定して司書などが仕事が続けられるような環境を定着させるべきでしょう。

猪谷 2015年8月26日に鎌倉市図書館がツイッターで「もうすぐ二学期。学校が始まるのが死ぬほどつらい子は、学校を休んで図書館へいらっしゃい。マンガもライトノベルもあるよ。一日いても誰も何も言わないよ。9月から学校へ行くくらいなら死んじゃおうと思ったら、逃げ場所に図書館も思い出してね」という投稿をしています。2学期が始まる直前は、自殺をする子どもたちが一番多い時期です。それを知った司書が、死ぬほど学校がつらい子は図書館にいらっしゃいと呼びかけたのです。それが共感を呼んで10万件以上のリツイート^{※1}があり、テレビや新聞でも取り上げられました。これこそ、みんなが期待している図書館の役割の一つだったと思います。

ところが、教育委員会で不登校を助長するのではないか、投稿を削除すべきだという議論になったそうです。結果的には図書館側が自殺防止のためのツイートだったことを説明し、削除さ

※1 リツイート

ソーシャルネットワークサービスのツイッターで、ほかのユーザーのツイート（つぶやき）を引用形式で自分のアカウントから発信すること。

れませんでした。鎌倉市図書館は直営なので司書は正規職員でしたが、ツイートした司書が指定管理者の非正規雇用の職員であれば責任を問われていたかもしれないと感じました。

直営で正規の司書であるという立場の強さは、図書館の独立性にもつながってくるので、そこはとても大切な部分だと感じました。

——図書館の立場でしっかり主張できる仕組みが必要ですね。図書館の役割の変化に対応した自治体政策のあり方を議論していくことも大切でしょう。

まちづくりの核になっている紫波町^{し わ ち ょ う}図書館

——著書ではまちづくりを担う図書館の事例を多く紹介されていますが、『町の未来をこの手でつくる 紫波町オガールプロジェクト』の岩手県の紫波町は、域内循環にこだわった先進的な取り組みをしているまちですね。

猪谷 紫波町図書館は若手農家のコミュニティの場になるイベントを仕掛けたり、農家を紹介する企画展を行ったり、2012年の開館当初から農業支援サービスを手がけています。当初は、まちの産業を図書館が支える試みに興味があって取材を始めました。

紫波町は人口3万3千人ほど、紫波中央駅前に広がっていた10.7haの町有地を開発する一大プロジェクトが「紫波町オガールプロジェクト」です。オガールとは成長を意味する紫波の方言「おがる」とフランス語の駅を意味する「Gare（ガール）」などを組み合わせた造語ですが、町や町民がここで育っていくという意味が込められています。

役場庁舎やマルシェ、住宅や体育館などの施設がありますが、その核の一つが紫波町初の図書館でした。そこに図書館をつくることは、町としては絶対譲れない要素の一つでした。

このプロジェクトは2009年2月に策定された「紫波町公民連携基本計画」のもとに進められました。紫波町の諮問機関である「経営品質会議」に、31歳という若さで委員に抜擢されたのが、キーパーソンの岡崎正信さんです。彼は地元の建設会社の跡取り息子で、特殊法人地域振興整備公団での勤務経験があります。各地の都市再開発事業を手がけていて、日本の再開発は建物や道路などのハード整備を優先することに疑問を抱いていたようです。また、アメリカでPPP（官民パートナーシップ）や公民連携の開発が成功していることを知り、帰郷後に東洋大学大学院に入学して公民連携の知識や技能を学び直し、町内で公民連携を提唱した人です。

こうしたプロジェクトを進めるには町役場と民間の足並みがそろわないとうまく進まないのですが、非常にうまくハンドリングされていました。また、外部の景観デザイナーや建築家など、第一線で活躍している専門家を巻き込んだデザイン会議を設置し、景観やサイン、住宅のたたずまいなど、デザインがブレないように徹底しています。

そうやって出来上がった空間はとても居心地が良く、中心にある「オガール広場」が核になって、その周りに建物があり、今では年間約100万人が訪れるエリアになっています。

図書館づくりでは、町役場の皆さんが熱心に各地の図書館を視察しています。また、鳥取県立図書館と並んでビジネス支援で定評のある秋田県立図書館の副館長にお願いして優秀な司書を紹介してもらうなど、紫波町にふさわしい図書館を実現するためにいろいろな努力をされました。

紫波町図書館は地元の人に愛されているだけでなく、電車で20分かけてわざわざ盛岡市からやってくる高校生もいるそうです。それだけ居心地がいいのだと思います。

また、オガールの敷地内にある役場庁舎や

住宅には、エネルギーの地産地消を目指して、バイオマス燃料を利用した熱を供給して給湯や冷暖房に使われています。これらの住宅は「紫波型エコハウス」と呼ばれていますが、その施工は町内の工務店が担い、他の地域に負けないう、技術力や競争力を高める一助にもなっています。

——域内循環を実践するまちとして、20数年前から紫波町には着目していましたが、その精神はしっかり引き継がれていますね。地域の資源に魅力と付加価値を付けていくまちづくり戦略の延長線上に図書館も位置付けられているようです。

世界にも発信できる甲州市立勝沼図書館

猪谷 先日訪問したのが、「Library of the Year 2018」で大賞とオーディエンス賞を受賞した甲州市立勝沼図書館です。1996年に開館した図書館で、当初からぶどうとワインの資料を集めています。一般貸出を行う図書館で、ぶどうとワイン関連の蔵書量は日本で随一の規模です。日本十進分類法で分類していますが、ぶどうとワインについてはさらに細かく独自の分類をしていて、東京のレストランのソムリエなどワイン関係者がそこで勉強していくそうです。

——そこに行けばぶどうとワインをすべて学ぶことができるという特色を目指しているのですね。

猪谷 海外のワイン雑誌や一般に流通しない学会誌もそろっています。地元ワイナリーの皆さんも図書館で情報を得て、いかに自分たちのワインの付加価値を高めるか、海外に輸出するにはどうするかなど、そこで学んでいます。

司書の皆さんは、新聞を毎日チェックしてぶどうやワインに関する記事があれば切り抜いて

スクラップするなど、地道な資料収集活動が続けています。そんな情報の蓄積は他にありません。地元ワイナリーの情報も個別のファイルがあり、ワイナリーのパンフレットや航空会社の機内誌に掲載された記事まで所蔵されています。観光客もワイナリーのことを知りたければ、ここを訪れるといいと薦められるそうです。

また、図書館でワインを試飲できるイベントを開催するなど、日常的にワイナリーとお付き合いをしているからこそできる取り組みをいろいろ実践しています。

そのように、地道にまちを支えている図書館が全国にあることを多くの皆さんに知ってほしいですね。

——甲州市立勝沼図書館は世界中から人を呼べる魅力があり、地方の図書館が目指す一つの方向といえますね。

図書館は書店や出版社とも連携を

——図書館をめぐる動きの一つにデジタル化があります。書籍がデジタル化していく流れに、図書館はどう向き合えばいいのでしょうか。特に、地方では難しい命題です。

猪谷 デジタル化はなかなか進んでいない状況だと思います。2007～12年、長尾真館長時代に国立国会図書館が大規模なデジタル化を実施しましたが、その後はあまり明るい話題を聞いていません。



※2 kindle

アマゾンが開発・販売している電子書籍リーダーのこと。電子書籍データを含めて指すこともある。

まず、著作権の壁が厚いという問題があります。でも、kindle^{※2}でしか出ていない本もありますから、そういったデジタル書籍をどのように収集していくかは、大きな課題で、難しい問題だと感じています。

——北海道では早くから札幌市中央図書館がデジタル化に取り組み、古書などを公開するデジタルライブラリーのほか、電子書籍の貸出ができる電子図書館を開設しています。また、その動きに呼応して2013年には地元の出版社が集まってデジタルコンテンツを図書館に提供するために、一般社団法人北海道デジタル出版推進協会が発足しました。これはその後、地元の出版社と図書館と地元書店が連携を深めていくことにもつながっています。これからは図書館も書店や出版社と連携していくことが重要だと感じています。

猪谷 図書館と書店がコラボレーションする動きは出てきています。特に地方での書店経営は厳しいので、図書館が本を購入するだけでなく、一緒にイベントをする例が出てきています。図書館と書店、そして出版社は、本の文化を伝え、読書の推進やその環境を盛り上げていくために協力できることはたくさんあると思います。

青森県八戸市では自治体直営の書店「八戸ブックセンター」ができています。民業圧迫だと批判はありましたが、実際に開店してみるとや

はり品ぞろえが違います。市内の書店はコミックや雑誌などの売れ筋といわれる本が多いのですが、八戸ブックセンターには大型の美術書や読書好きな人が手に取りたくなるような本が並んでいて、差別化されています。また、市内にある書店員が魅力的な棚づくりを学ぶ場にもなっています。

まちに本好きな人を増やし、八戸を「本のまち」にするために、本のある暮らしの拠点が八戸ブックセンターなのです。今はまだ図書館が関わっている取り組みはないようですが、今後は図書館との連携が生まれてくるだろうと期待しています。

八戸ブックセンターで面白いのが、店内にある「カンヅメブース」です。市民作家として登録をすれば安価で借りられる部屋で、文字通り「カンヅメ」になって執筆ができる空間を提供しています。地元で作家を育てていこうという狙いがあり、高校生からシニアまでいろいろな人が登録しているそうです。そういう場があるかないかで、まちの空気感が違います。自分が作家活動をしていなくても、そういう人たちの存在が可視化されるだけで、そのまちの息づかいが決定的に違ってくると思います。

良いまちには、良い図書館が

——お話を聞いていると、紫波町や甲州市勝沼など、前向きなまちづくりを実践し、その精神が根付いているまちで

は、良い図書館をつくり上げていますね。図書館にはいろいろなポテンシャルがあることも感じます。その一方で、財政難などから、前向きな運営につながっていない例もあるように思います。



猪谷 それを変えていくには首長や議員、行政職員の意識を変えることも大切ですが、住民の皆さんとつながっている図書館であることも重要な要素だと思います。例えば伊万里市民図書館は、市民が主役の図書館づくりを実践してきました。人口5万人くらいのまちですが、常に400人ほどのボランティアの人たちがいて、図書館運営を支えています。

以前、講演に呼んでいただいた北海道の北広島市図書館もボランティアの皆さんの力が大きく、図書館との連携が素晴らしいと思いました。

良い図書館があるまちは、良いまちだと感じています。当然、司書の皆さんはそのことをよくご存じだと思いますが、周りにいる住民の皆さんにもそこに気付いていただけるような努力が必要です。もっと図書館の役割を知っていただくべきですし、それをもっと図書館側から発信していくべきだと思います。

先ほどお話した東日本大震災の被災地で、早々に仮開館した図書館は、普段から住民に愛されていたところが多くありました。日常的に住民とつながって、一緒に図書館づくりを応援している人たちがいる地域は強いのです。

2012年に神奈川県立図書館が財政難のあおりを受けて、閲覧、貸出の廃止などを打ち出したことがありました。横浜市には市立図書館が18館あり、二重行政だと批判されたことが背景にあるのですが、図書館の皆さんがバックヤードツアー^{※3}などを開催し、県立図書館の役割や市立図書館との違いを地道に伝えていきました。結果的に、その後、閲覧サービスの継続などが決定し、県立図書館の役割も県民の知の拠点として発展させるという方向に転換されました。

図書館側からどんどん発信して、市民を味方にしていくことが第一歩だと思います。

先ほど鎌倉市図書館のツイッターの話題をお話ししましたが、私は以前から鎌倉市図書館のツイッターをフォローしています。それは、アジ

サイが咲きましたなど、ちょっとした地元の情報が発信されていて、とても心地が良かったからです。SNSなどを活用しながら、普段から図書館と住民の皆さんがつながっていくことは、とても大切だと思います。例えばニューヨークの公共図書館は、インスタ映えする写真を毎日のようにアップしていて、何千件もの「いいね」がついています。あの発信力には感心します。

——SNSの利用など、公立図書館でもお金をかけずにできることがいろいろありそうですね。今日はありがとうございました。

聞き手 (一社) 地域研究工房代表理事
小磯 修二 (こいそ しゅうじ)

PROFILE

猪谷 千香 (いがや ちか)

1971年、東京都生まれ。明治大学大学院博士前期課程考古学専修修了。産経新聞で長野支局、文化部記者などを経て、ニコニコ動画やハフィントンポスト日本版などインターネット上の配信サービスでニュース担当や記者を務める。現在は「弁護士ドットコム」でニュース記者を務めながらジャーナリスト活動が続いている。著書に『つながる図書館—コミュニティの核をめざす試み』(ちくま新書)、『町の未来をこの手でつくる 紫波町オガールプロジェクト』(幻冬舎) など。

取材協力「旅の図書館」

今回のインタビューは、公益財団法人日本交通公社(JTBF)が運営する「旅の図書館」を会場に利用させていただきました。

観光関連の学術誌や観光統計、古書、ガイドブック、機内誌など、観光の研究と実務に役立つ図書を取りそろえている専門図書館です。館内での閲覧のみですが誰でも利用でき、観光関係者が学びながら交流できる「たびとしょCafe」も年4回程度開催しています。東京にお出かけの際には、ぜひご活用ください。



〒東京都港区南青山2丁目7-29日本交通公社ビル
開 10:30~17:00 休 土・日曜日、祝日、第4水曜、年末年始など。詳細は <https://www.jtb.or.jp/library/> を。

※3 バックヤードツアー

普段は関係者しか入ることができない施設や舞台などの裏側を見学してもらう催しのこと。